

# 国語 試験問題

二月一日実施

## 注 意

- 一、試験開始の合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二、問題は余白をふくめ、十八ページにわたっています。
- 三、試験時間は五十分間です。
- 四、答えはすべて解答用紙の決められた欄らんに記入しなさい。

京華中学校

受験番号

氏名

余白

問題は次のページから始まります。

余白

一、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

スポーツクライミングの大会で準優勝するほどの実力を持ちながら、自分には才能がないと思いこみ、やる気を失っていた中学一年の天野あかりは、母親のすすめでパラクライマー（身体に障害のあるクライマー）との交流イベントに参加した。そのことをきっかけに同い年で全盲ぜんもうの少年、白石昂すばるとペアを組むことになった。本文は、二人が練習を終えて帰る場面である。

今日はお母さんとランチをする約束になっている。

あかりは一番乗りで着替きかえをすませると、イーストケイブ\*を出た。すると、出入り口のおきに昂あかりが立っていた。壁かべに背をあずけながら「カチャ、カチャ」と、折りたたみ式の白杖はくじょうをのばしたりたたんだりしている。

気づかれていないとはいえ、無言で通りすぎるのはよくない気がした。

「迎えをまつてるの？」

声であかりと気づいたようだ。黒いスポーツサンングラスがゆっくりとこちらをむいて、「まあな」とひと声、返事があつた。

「いつも車で来てるの？」

「来るときは電車。で、帰りが迎え」

なかなか立ちさるうとしないあかりを気配で感じとったのか、昂あかりが A いう。

「なんだよ？」

「べつに」

あかりは一步、二歩と歩きだしたところで、意を決してふりかえった。

「今日はごめん！」

「はっ？」

「わたしの勝手な判断で、別のルートของホールドを使っちゃったでしょう？ そのことをおこってるんじゃないかと思って」

「べつに、おこってねえし」

1 1  
そういうわりには声がかたい。

あかりはぎゅつと拳こぶしをにぎると、覚悟かくごを決めた。

「だったら大きくけど、今日の一本目、頂上まで登りきったとき、昴はどんな気分だった？」  
とつげんの質問に、昴の眉間みけんにしわがよる。

「なんだよ、急に」

以前、高橋さんは、昴を次世代のブラインドクライマーに育てたい、そのためにも同年代のクライマーから刺激しげきを受けてもらいたいと話していた。一方で、昴は期待されるのが迷惑めいわくだとぼやいていた。

あかりは大きく息をすいこむと、話しはじめた。

「わたしがはじめてゴールのホールドをつかんだのは、小学校四年生のときだった。その瞬間しゆんかん、頭がしびれたみたいになった。自分の身体からだひとつでこんなに高いところまで登ってこられたことが、信じられなかった」

ちなみに、感激のあとにせりあげてきたのは恐怖きょうふだった。はるか下に地上があることを思いだすや、身体がふるえた。ただ、二度とこんな気分を味わいたくないとは思わなかった。次はちがうルートを完登するんだと、早くも心に決めていた。

昴はどんなふうに感じたのだろうか？ 今後、どういうトレーニングがしたいとか、計画や要望はあるのだろうか？ そもそも、あかりとのペアに手ごたえは感じているのだろうか？

本音が知りたかった。

「はじめてだよな。おまえが自分のことを話すの」

ずばり指摘してきされて、あかりは言葉につまった。

「それは、だって、昴がいつも不機嫌ふきげんだから……」

ううん、ちがう。たしかに、昴がいうとおりだ。クライミングからにげているのがうしろめたくて、最低限のことしか話してこなかった。今だって、練習からにげつづけていることは話せそうにない。

あかりが顔をうつむけたそのとき、ぼそつと声が出た。

「おれにも登れるんだなって、そう思ったよ。べつに、登れるわけがないって決めつけてたつもりはなかったけど、だけど、もしかしたら、そうだったのかもしれないな」

昴はどこか照れくさそうに、

**B** 話した。

昴が本音を語ってくれたことがうれしくて、あかりは気をとりなおすとまた質問した。

「昴がはじめてブラインドクライミングをやったのはいつだったの？」

「そっちは小四？」

「うん。ちょうど今、昴が立ってるあたりから店内をのぞいていたら、ジムのスタッフが声をかけてくれたの」

「おれは小六の秋。中学受験の息抜きになるんじゃないかって、母親がさがしてきたんだ。いまだに、親父はおれがクライミングやつてることは知らないんじゃないかな」

「それ、どういう意味？」

「うちの親父、海外に単身赴任中なんだ。うちの両親は教育方針がまったくちがってて、どこにチャンスが転がってるかわからないからなんでもやってみろっていう母親に対して、親父はすっげえ保守的で学歴重視のタイプ。余計なことはしなくていいから、勉強だけしてろって。そんなわけだから、クライミングをやってることは話してないんだ」

「それでも昴はクライミングをつづけているんだね」

あかりが **C** つぶやくと、昴ははじめたように頭を動かした。

「だって、そうでしょう？ もう受験は終わったのに、お父さんじゃないしょにしまでつづけてる。それはどうしてなの？」

「おまえって、すっげえストレートだな。きっと、気をつかわれすぎてみじめな気持ちになったことなんて、ないんだろかな」

あかりは「え？」と、ききかえした。

昴がいうには、パラスポーツの中には、ルールや道具がアレンジされすぎていると感じるものもあるそうだ。そうになると、健常者が考えたまったく別のスポーツという感じがして、やる気がおきないという。

「気をつかわれすぎるって、けっこうしんどいんだぞ。母親からブラインドクライミングをすすめられたときも、最初は半信半疑だったよ。どうせ、ふつうのクライミングとは似ても似つかないものなんだろって」

\***晴眼者のナビゲーター**がつくとはいえ、ブラインドクライミングのルールは一般的なクライミングとかわらない。器具にたよることなく、身体ひとつで、ウォールに設定されたルートを登りきることに。大会では、時間内に登れた高さを示す「獲得高度」で順位が決まる。

「少なくとも、おれがこれまでに経験したパラスポーツの中ではいちばんオリジナルに近い気がしたんだ。やってて、**2** 2  
めな気持ちにならなかった。これで満足か？」

話したいことはまだあったが、黒い車が昴の前に横づけされた。

エンジン音とクラクションで迎えが来たことに気づいたのだろう、昴が白杖をのぼす。助手席へむかって歩きはじめたその背中に、あかりは声を投げた。

「もっと練習してみない？」

「はっ？」

「二週間に一度登ってるだけじゃ、うまくなれないと思う。週に三回、せめて二回は練習しないと筋肉も大きくならないっていうし」

「おれ、うまくなりたいなんていったか？」

「どうしてうまくなりたくないの？」

3 「うまくなって、その次は？ 晴眼者のわがままにつきあって、大会を目指して、ゆくゆくはどうしろって？」

あかりは高速で頭を回転させた。

上達を目指す理由はやっぱり、高橋さんたちの期待にこたえるため？ 昴が指摘したとおり、いつか大会に出て、ゆくゆくは優勝して、有名なクライマーになるのが最終目標？

ううん、大会には出場しないクライマーでも練習にあけてくれている人はたくさんいる。

「うまくなると、楽しいよ！」

あかりがそう結論を出すと、車のドアに手をかけていた昴がピタッと動きを止めた。

「わたしはクライミングウォールは夜空だと思って、ホールドは星くずだと思ってる。だから、ウォールにしがみついているときは宇宙を散歩しているみたいで、すっごく楽しいの！ クライミングが上達すると、長い時間、いろんな夜空を登っていられるでしょう？ すっごくすっごく楽しいよ！」

4 あかりは自分でいっておいて、自分の発言におどろいてもいた。

ケガを機に、クライミングとむきあうことにすっかりおじけづいていた。本気で挑んだところで、望んだ成果はえられない。本気になればなるほどクライミングからそっぽをむかれるような気がして、練習にもどる気になれなかった。そして、いつのまにか、クライミングが楽しいということをしっかりわすれてしまっていた。

「だったらきくけどさ、今日はどうして星の話をしなかったんだよ？」

昴はあかりに背をむけたまま、ぶっきらぼうにいいはなった。

「星の話？」

「今日だけじゃない、前回もしなかったよな？ はじめておまえと登った日、今から、うみへび座を登るってきいて、おれ、すっげえわくわくしたんだ！ 自分がうみへびのしっぽからはいあがつて、ゴツゴツした鱗うろこにおおわれた背中を登っていく光景が脳裏のうりに広がったっていうか。なのに、最近は、方向だ、もちかただ、ルートがどうしたって話ばっかで、クソつまんなかった！」

まさか昴がそんなふうに感じていたなんて……。

たしかに、的確な「HKK」<sup>\*</sup>を心がけるあまり、ウォールの美しさや、ルート全体にかかわる星の話をすっかりわすれていた。楽しいはずのクライミングを、こむずかしいスポーツにしてしまっていた。

「ごめん」

あかりがあやまった直後、「プププ」とクラクションがなった。

白杖を折りたたんだ昴が背中をまるめて、今度こそ助手席に乗りこむ。

あかりはあわててさげんだ。

「一週間後の土曜日は？ 今日と同じ十一時」

「……………」

「ウォールって宇宙みたいにきれいな！」

「……………」

「まってるからっ」

ボタンとドアが閉まる。

昴に乗せた車は、あつというまに遠くへ行ってしまった。

(榎崎茜『星くずクライミング』による)

(注)

\*イーストケイブ：クライミングジムの名称めいしやう。

\*白杖：視覚障害者が歩行するときに使用する白い杖。

\*高橋さん：クライミングのイベントを主催する団体の代表しゅさい。

\*晴眼者：視覚に障害がない者を表すことば。

\*HKK：ナビゲーターがクライマーに出す指示のこと。Hは「方向」、Kは「距離」、次のKは「形」を意味する。



1.   にあてはまることばとして適当なものをそれぞれ選び、符号で答えなさい。

ア しみじみと      イ あっさり      ウ むつつりと      エ ぼそぼそと

2. ——— 線部1に「あかりはぎゅっと拳をにぎると、覚悟を決めた」とありますが、このときのあかりについて説明した  
ものとして最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 頂上まで登りきれた昴が不機嫌そうに見えることを気にして、クライミングや自分に対する昴の思いを確かめようと  
している。

イ 頂上まで登れるほどに成長した昴に大きな可能性を見出して、年代で一番のクライマーを目指すことを後押ししし  
うとしている。

ウ 昴の態度がぶっきらぼうなのは指示を出す自分の力不足のせいだと反省して、今後の練習に影響が出ないように誠  
心誠意あやまろうとしている。

エ 昴の迎える車ももうすぐ到着してしまいうことにあせりを感じて、昴と自分のペアとしての相性を今すぐ確かめよう  
としている。

3. ——— 線部2に「みじめな気持ちにならなかつた」とありますが、この理由を説明した次の文章の   にあ  
てはまることばをそれぞれ指定字数で抜き出しなさい。

昴がこれまでに経験してきた  (六字) の多くは、ルールや道具に大きな  (四字) が加えられていて、  
オリジナルの競技と  (六字) のように思えてまったくやる気が起きないものであった。しかし、ブライインド  
クライミングは特別な道具にたよることなく自分の  (五字) で楽しめるといふ点で、オリジナルの競技に近  
いものであると感じたから。

4. ——— 線部3に「あかりは高速で頭を回転させた」とありますが、このときのあかりの説明として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 昂にうまくなる意味を問われ、大会で結果を残すことの喜びを理解して欲しくて、トレーニングの重要性をどのように伝えるか必死に考えている。

イ 昂に周りからの期待にこたえる意味を問われ、昂が満足する答えを出すことができずに、この場をやり過ぎするための口実を必死に考えている。

ウ 昂にクライミングの楽しさを問われ、自分が楽しむことよりも周りへの感謝が大切だと考え、どうすれば理解してもらえるか必死に考えている。

エ 昂に練習する意味を問われ、とっさに自分でもたしかかな答えを見出すことができなかったものの、納得してもらえない説明を必死に考えている。

5. ——— 線部4に「あかりは自分でいってにおいて、自分の発言におどろいてもいた」とありますが、あかりが「自分の発言」におどろいていたのはなぜですか。四十五字以内で説明しなさい。

6. ——— 線部5に「まさか昂がそんなふうに感じていたなんて……」とありますが、このときのあかりの心情として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 夜空にある星座につかまって登っていくというイメージに、昂が共感してくれていたことにおどろきつつも、その楽しみをナビゲーターである自分の指示により奪っていたことに気づき、申し訳なく思っている。

イ 繰り返し練習を重ねていくことで上達していく楽しさを、昂が共感してくれていたことをうれしく思う一方、ナビゲーターである自分が彼に抱く期待が彼のプレッシャーになっていたことに気づき、申し訳なく思っている。

ウ 宇宙を散歩しているかのように感じられるクライミングの魅力に、昂が興味を示してくれたことをうれしく思うとともに、ナビゲーターである自分の出す指示を不満に思っていたことを知り、申し訳なく思っている。

エ クライミングが上達するように練習量を増やすという提案に、昂が難色を示していることを残念に感じるとともに、昂にうまくなってほしいという自分の思いを迷惑に感じていたことを知り、申し訳なく思っている。

7. この文章について説明したものと最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

- ア あかりと昴の会話を中心に物語を進めることで、二人がクライミングの魅力について議論する様子が描<sup>えが</sup>かれている。
- イ あかりが自問自答することで、自身のクライミングに対する思いを整理していく様子が描かれている。
- ウ あかりの視点で物語が進められており、あかりがクライミングに復帰しようと決意する姿が描かれている。
- エ あかりと昴のぎこちない会話を連続させることによって、決して縮まらない二人の距離感が描かれている。

## 二、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ある研究者は「シンギュラリティ（AIがヒトの能力を超えてしまう技術的な転換期）」が起こり、ヒトの仕事の半分近くはAIに取って代わられると予測しています。このシンギュラリティによりヒトが仕事を失って不幸になるのか、あるいはロボットに助けられて幸せになるのかは、あまり議論されていませんが、どちらかと言うと不安を煽るような見方で「将来消えてしまう職業」というような報道が多いと思います。現在、その「将来消えてしまう職業」に就いている人はいい気分ではないですね。

逆に、AIの進出で将来増える職業はあるのかというと、システムエンジニアとかプログラマーとかとなりますが、こちらもAI自身によるプログラミングが進むと、ヒトはもはやそれも理解できなくなる可能性があります。A 確実に職業の選択肢が減るのです。

このように考えると、あまり良いところはなさそうです。さらにはAIとうまく共存していかないと、逆に生きにくくなる可能性があります。こうなるとAIは便利な道具というよりは、ヒトより知能が進んだエイリアンの存在となりますね。そして進化的には、AIとうまく付き合える人が「選択」されるのかもしれない。一番困るのは、AIが何かの理由、例えば新型コンピュータウイルスなどで使えなくなると、もうどうにもなりません。

もう少し、AIと共存していく社会について、考えてみましょう。AIは何らかの答えを出してくれますが、その答えが正しいかどうかの検証をヒトがするのが難しいところがあるが、まず問題です。大切なことは、何をAIに頼って、何をヒトが決めるのかを、しっかりと区別することでしょう。

データをコンピュータに学習させて、それを基に分析を行う機械学習のようなAIは、過去の事例からの条件（重み付け）にあった最適な答えを導き出すので、その学習データの質で答えが変わってきます。画像診断のように「答えを知っている」医師の判断を、見落としなどがないように助ける道具としては十分に役立ちます。ただ、例えば過去の事例にないケースの判断は難しいです。

機械学習型ではなく、SF映画に登場するヒトのように考える汎用型人工知能はどうでしょうか？ まだ開発途中ですが、さまざまな局面でヒトの強力な相談相手になることが期待されています。こちらは使い方を間違うと、かなり危険だと思っています。B、ヒトが人である理由、つまり「考える」ということが激減する可能性があるからです。一度考える

ことをやめた人類は、それこそ AI に頼り続け、「主体の逆転」が起こってしまいます。ヒトのために作ったはずの AI に、ヒトが従属してしまうのです。

ではそうならないようにするには、どうすればいいのでしょうか。私の意見としては、決して「ヒトの手助け」以上に AI を頼ってはいけないと思います。あくまで AI はツール（道具）で、それを使う主体はリアルなヒトであるべきです。

「いや、AI のほうが賢明な判断をしてくれるよ」とおっしゃる方もおられるでしょう。C、それは時と場合によりま

す。いつも正しい答えが得られるという状況は、ヒトの考える能力を低下させます。ヒトは試行錯誤、つまり間違えることから学ぶことを成長と捉え、それを「楽しんで」きたのです。喜劇のコントの基本は間違えて笑いを誘い、最後はその間違いに気づくことが面白いのです。逆に「悲劇」は、取り返しがつかない運命に永遠に縛られることに、恐怖と悲しみを覚えるのではないのでしょうか。

AI は、人を楽しませる面白い「ゲーム」を提供するかもしれませんが。しかし、リアルな世界では、AI はヒトを悲劇の方向に導く可能性があります。そして何よりも私が問題だと考えるのは、AI は死なないということなのです。

私たちは、たくさん勉強しても、死んでゼロになります。文化や文明を継承するために教育に時間をかけ、次世代を育てます。一世代ごとにリセットされるわけです。死なない AI にはそれもなく、無限にバージョンアップを繰り返します。

私は 1963 年の生まれで、大学生の時（1984 年）にアップル社からマッキントッシュ（Mac）のコンピュータが発売され、その後ウィンドウズが誕生したのを体験してきました。ゲームも、フロッピーディスクに入った「テトリス」を 8 インチの白黒画面でハイスコアを競ったものです。その後のパソコン、ゲーム機、スマホなどの急速な進歩は、本当に驚きです。

私はコンピュータの急成長も可能性も脆弱性も知っている「生みの親」世代です。そしてコンピュータが「生みの親」より賢くなっていくのを体感しています。だからこそ AI の危険性、つまりこのままいつたら絶対にやばいと直感的にわかるのかもしれませんが。

そんな私でも自分の子供の世代には警鐘を鳴らせますが、孫の世代はどうでしょうか。孫たちにとってヒト（親）の能力をはるかに凌駕したコンピュータが生まれながらにして存在するのです。タブレットで読み・書き・計算を教わり、私情が入らないようにと先生代わりの AI が成績をつけるという時代にならないとも限りません。そんな孫の世代にとって、<sup>2</sup>は、AI の危険性より信頼感のほうが大きくなるのは当然です。

死なない AI は、私たち人間と違って世代を超えて、進歩していきます。一方、私たちの寿命と能力では、もはや複雑

すぎるAIの仕組みを理解することも難しくなるかもしれませんね。人類は1つの能力が変化するのに何万年もかかります。その人類が自分たちでコントロールすることができないものを、作り出してしまったのでしょいか。

進歩したAIは、もはや機械ではありません。ヒトが人格を与えた「エイリアン」のようなものです。しかも死にません。どんだん私たちが理解できない存在になっていく可能性ががあります。

死なない人格と共存することは難しいです。例えば、身近に死なないヒトがいたら、と想像してみてください。その人と、価値観も人生の悲哀も共有できないと思います。非常に進歩したAIとはそのような存在になるのかもしれませんが。

多くの知識を溜め込み、いつも合理的な答えを出してくれるAIに対して、人間が従属的な関係になってしまう可能性ががあります。私たちがちやうど自分たちより寿命の短い昆虫などの生き物に抱くような、ある種の「優越感」と逆の感情を持つのもかもしれません。「AIは偉大な」というような。

ヒトには寿命があり、いずれ死にます。そして、世代を経てゆっくりと変化していく——それをいつも主体的に繰り返してきましたし、これからもそうあることで、存在し続けていけるのです。AIが、逆に人という存在を見つめ直すいい機会を与えてくれるかもしれません。生き物は全て有限な命を持っているからこそ、「生きる価値」を共有することができるのです。

同様にヒトに影響力があり、且つ存在し続けるものに、宗教があります。もともとその宗教を始めた開祖は死んでしまっても、その教えは生き続ける場合があります。そういう意味では死にません。

ヒトは病氣もしますし、歳を重ねると老化もします。ときには気弱になることもあります。そのようなときに死なない、しかも多くの人が信じている絶対的なものに頼ろうとするのは、ある意味理解できることです。AIも将来、宗教と同じようにヒトに大きな影響を与える存在になるのかもしれませんが。

宗教は、付き合い方を間違えると、戦争やテロにつながるの歴史からご存じの通りです。ただ、宗教のいいところは、個人が自らの価値観で評価できることです。それを信じるかどうかの判断は、自分で決められます。それに対してAIは、ある意味ヒトよりも合理的な答えを出すようにプログラムされています。ただ、その結論に至った過程を理解することができないので、人がAIの答えを評価することが難しいのです。「AIが言っているのでそうしましょう」となってしまいかねません。何も考えずに、ただ服従してしまうかもしれないのです。

それではヒトがAIに頼りすぎずに、人らしく試行錯誤を繰り返して楽しく生きていくにはどうすればいいのでしょうか？

その答えは、私たち自身にあると思います。つまり私たち「人」とはどういう存在なのか、ヒトが人である理由をしつかりと理解することが、その解決策になるでしょう。

人を本当の意味で理解したヒトが作ったAIは、人のためになる、共存可能なAIになるのかもしれない。そして本当に優れたAIは、私たちよりもヒトを理解できるかもしれない。さて、そのときに、その本当に優れたAIは一体どのような答えを出すのでしょうか？——もしかしらAIは自分で自分を殺す（破壊する）かもしれないね、人の存在を守るために。

（小林武彦『生物はなぜ死ぬのか』による）

1. 

A
---

C
---

 にあてはまることばとして適当なものをそれぞれ選び、符号で答えなさい。

ア しかし      イ なぜなら      ウ つまり      エ 例えば

2. ———線部1「大切なことは……区別することでしょう」について、次の(1)・(2)に答えなさい。

(1) 区別しないなどのような危険性があると筆者は考えていますか。最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 人間が間違えることを極度に恐れ、AIに依存する状況が長く続いていくことになり、間違いを犯したときにその責任を機械にすべて押しつけるようになってしまうという危険性がある。

イ AIが出す答えにしたがって物事を解決する状況に慣れてしまい、人間が成長するのに重要な失敗するという機会を失い、考えることをやめた人間がAIに支配されてしまうという危険性がある。

ウ AIが絶対に正しい答えを出してくれると思ひ込みはじめ、「失敗したときはAIがなんとかしてくれる」と考えて、軽はずみな行動をする人間が増えていくという危険性がある。

エ AIの信頼度がますます高まり職業をAIに奪われてしまうことで、職に就けなくなった人間たちの不満が大きくなっていく、いざれ重大な事件が起こるといふ危険性がある。

(2) (1)のような危険をさけるためにはどのような考えに基づくべきですか。筆者の考えが述べられている部分を二文ひとつづきで探し、初めの五字を抜き出しなさい。

3. ———線部2に「AIの危険性より信頼感のほうが大きくなるのは当然です」とありますが、その理由として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 技術発展の歴史を体感していない世代は、すでに便利で快適なものとして生活に定着しているAIを、常に正解を出してくれるものであると思いついてしまっているため。

イ コンピュータの構造を理解していない人間は、人間の能力を超えて生活を豊かにしてくれるAIが犯す多くのミスに気づくことさえできないため。

ウ 初期のコンピュータの能力を知らない世代は、今のAIの高度な能力に満足してしまい、それ以上の技術革新を目指す意識が低くなってしまっているため。

エ 最新機器の扱いあつかに慣れている人間は、コンピュータの脆弱性をよく理解しており、AIにできることとできないことの区別がしっかりと判断できるため。

4. ———線3「そのような存在」とはどのような存在ですか。四十五字以内で説明しなさい。

5. AIと宗教の共通点を筆者はどのように考えていますか。最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 人間が迷ったり不安になったりしたときに心の支えとなるものであり、人々の希望として存在し続けている。

イ 人間の感情により左右されることがなく、誰だれにとつても正しい答えを導くための道具として存在している。

ウ 人間の意志決定や行動を左右する存在であり、「死」という区切りを持たず、多くの人に信頼されている。

エ 人間の想像を超えた存在であり、すべての人間が理解することができずただ従うだけになっている。

6. 本文の内容としてあてはまるものには○、そうでないものには×をそれぞれつけなさい。

ア シンギュラリティが起きた先のヒトの未来を、多くの研究者は肯定的こうじていてきに捉えられている。

イ AIは宗教とは異なり、戦争やテロの道具として悪用される可能性はない。

ウ 人間がAIの道具にされないためには、AIの出す答えを検証する機会を持つことが重要である。

エ 人間とAIの共存は、人間が道具としてAIを利用しようとする限り難しいと考えられている。

オ AIの発展により増える職種はあるものの、社会全体として職業の選択肢は減っていくと予想される。



三、次の①～⑤の——線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

- ① 皇居ミヤトの周りを走る。
- ② 後味ノチアジの悪い結末。
- ③ 制服セキフクの採寸サイサンをする。
- ④ 険ケンしい山道。
- ⑤ 長い月日ツキヒをス経る。

四、次の①～⑤の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① 衣類イレイをシユウノウする。
- ② 鉄道テドウモケイモケイを作成する。
- ③ 庭ニワをカクチヨウする。
- ④ オサナイ顔立ち。
- ⑤ 緊急キンギョウ事態シタイにソナえる。

余白

余白